

日本消化器外科学会雑誌編集後記

編集後記を担当するのも今回で3回目になりました。2007年の夏に本誌の編集委員を拝命し、約5年が経ちました。最長、任期は6年までということなので今回が最後の担当になると思います。

先日の定時社員総会で報告がありましたが、2011年度は採用率23.2%とたいへん厳しい狭き門でありました。編集委員が事務局の会議室に集まり、投稿された論文がより良いものになるよう熱心に議論を重ね、最高峰の邦文誌を目指し会誌が完成されていきます。最初から目を見張るほど推敲された論文から投稿規程がほとんど守られてない論文まで種々の論文が送られてきます。本論文の『Neues』は何か。それがきちんと明快に記載されていること重要です。この論文はこの主張が重要なポイントであり、その点でNo.1の論文であるということが明快に伝わるよう記載せねば、採用にはほど遠いと思います。医学の論文は科学論文であり、論理の組み立て、展開が必須であり、論理の飛躍があってはけません。

折しもロンドンオリンピックの真最中です。必死の努力をして本選に臨み、最高のパフォーマンスを発揮し、金メダルを目指す。そこに周囲の観衆は感動し、人々の心に残っていきます。この稿を書いているときはサッカーでは男子が最強の呼び声であったスペインに快勝し、モロッコを連破し、予選1位で決勝トーナメント進出を決めました。女子柔道の松本さんが日本初の金メダルを獲得し感動の涙を流し、一方銀メダルに終わった男子の平岡、中矢両名は金でないという意味がないと話しながら悔しさに目を潤ませ、それぞれの熱意・情熱がひしひしと伝わってきます。内村選手が個人総合で28年ぶりの金メダルを獲得しながらも内容的には本人は満足してないとのコメントでした。

論文も全く同じだと感じます。日常診療で多忙を極める中、症例あるいは研究結果をつぶさに観察し、文献検索をし、その内容を吟味し、当該領域での新しい主張を展開できるよう努力する。その情熱が伝わってくる論文は採択され、読者にもまたその主張が伝わっていくことと思います。編集委員もより良いものとなるよう多忙の中、手伝っています。多くの特に若い消化器外科医に、本学会誌への投稿が英文論文を作成するステップアップの第1歩として懸命に論文を完成させ、その論文が形となって掲載され、多くの読者に読まれる喜びとなることを味わっていただきたいと思います。

(松原 久裕)

2012年8月1日